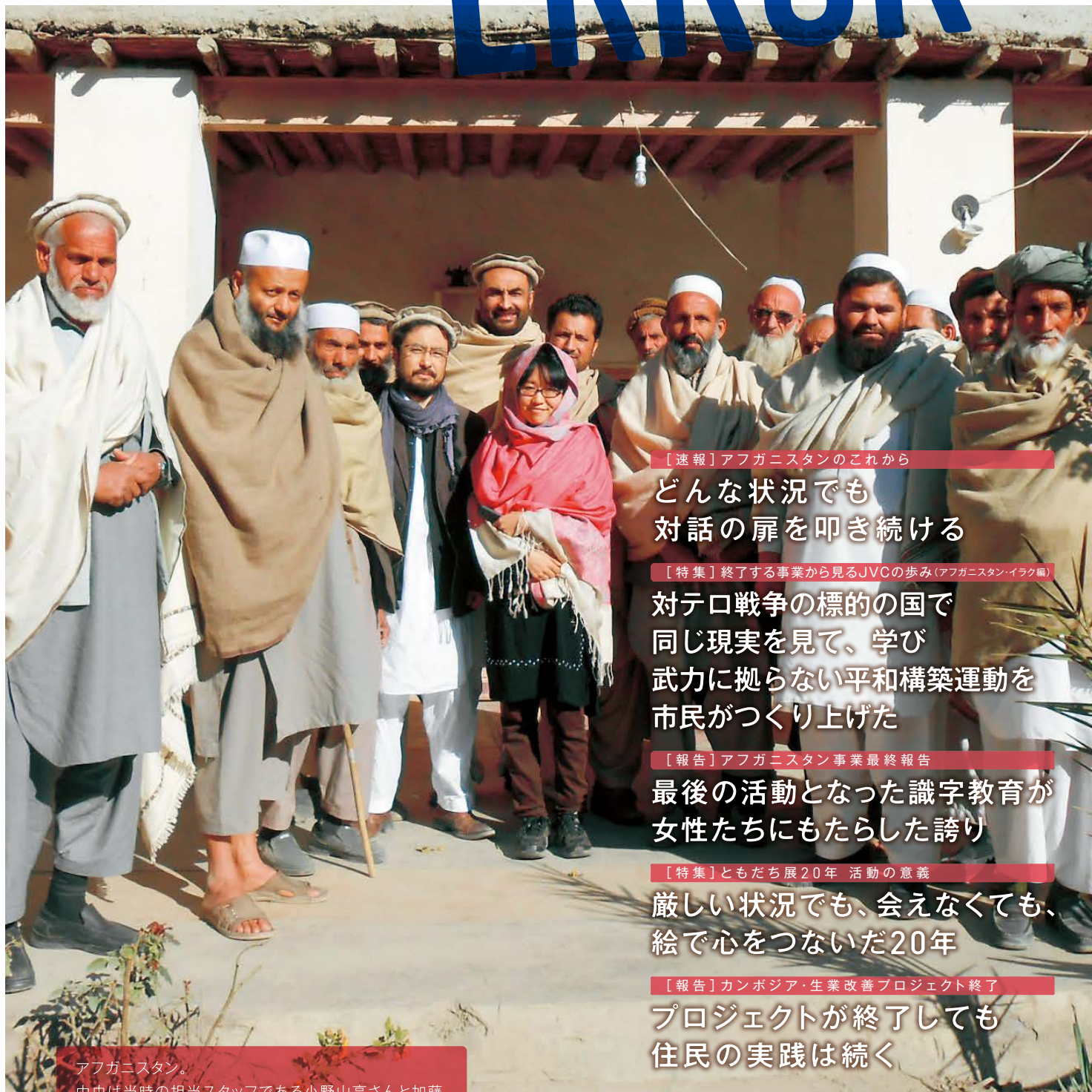


TRIAL &

JVC 日本国際ボランティアセンター会報誌 トライアル・アンド・エラー (試行錯誤)

ERROR



【速報】アフガニスタンのこれから

どんな状況でも
対話の扉を叩き続ける

【特集】終了する事業から見るJVCの歩み(アフガニスタン・イラク編)

対テロ戦争の標的の国で
同じ現実を見て、学び
武力に拠らない平和構築運動を
市民が作り上げた

【報告】アフガニスタン事業最終報告

最後の活動となった識字教育が
女性たちにもたらした誇り

【特集】ともだち展20年 活動の意義

厳しい状況でも、会えなくても、
絵で心をつないだ20年

【報告】カンボジア・生業改善プロジェクト終了

プロジェクトが終了しても
住民の実践は続く

アフガニスタン。
中央は当時の担当スタッフである小野山亮さんと加藤
真希さん。2016年、地域の指導者たちと。

「速報」アフガニスタンのこれから

どんな状況でも

対話の扉を叩き続ける



JVC顧問 谷山 博史

今年8月、タリバーンがアフガニスタンのほぼ全土を制圧して政権復帰した。メディアは、女性の人権問題や避難を求め空港に殺到する人々を報道するばかりで、政権奪取に至るまでの検証や対テロ戦争の検証もないままタリバーンを批判する。

だが、現地のNGOは早速タリバーンとの対話を重ね、9月上旬に女性の識字教育活動の許可を得た。この事例は、国際社会も、批判だけではなくタリバーンとの対話の扉を叩き続ける必要性を示唆しているのだ。

メディアと国際世論の混乱

タリバーンがアフガニスタンのほぼ全土を制圧して政権に復帰した。

アメリカの撤退開始から3カ月も経たない激変に世界は驚愕し、言葉を失った。

この呆然自失の状態は今も尾を引き、今起きていることを冷静に判断できていない。メディアが女性の人権問題や避難を求めて空港に殺到する人々のことばかりを報道するのはその現れである。

このようなメディアの姿勢は9・11後のアフガニスタン攻撃のときと何も変

わっていない。タリバーンとは何者で、なぜアメリカを敗退させるに至ったのか。アフガニスタンはどういう国で、そもそも同国への対テロ戦争はなんだったのか、膨大な額を費やした20年にわたる復興支援はなんだったのか。

歴史を遡らないと理解できない

アフガニスタン戦争が対テロ戦争として始められたことが大きなボタンの掛け違いの始まりである。アメリカは、通常の戦争ではなく講和なき戦争として始めたため、タリバーンとの交渉を一貫して認めなかった。これが、戦争を避ける機会と戦争を終わらせる機会を3度にわたって失わせ、アフガニスタンを20年にわたる泥沼の戦争に引きずり込んだ。

1度目は開戦直後。

タリバーンがビン・ラディンが犯人である証拠を示せばビン・ラディンを引き渡すと言ってきた時である。だがブッシュは交渉を拒んだ。

2度目は主要な戦闘が終わり、南部カンドハルに撤退したタリバーンが降伏の用意があると提案したとき。アメリカは提案を一笑に付し、追撃の手を緩めなかった。タリバーンは地下に潜った。アメリカはタリバーンを根絶やしにする掃

討作戦を展開し、民間人を巻き添えにして多くの犠牲者を出した。

3度目は、2006年から08年にかけてアフガニスタン政府と国連がタリバーンとの和平に舵を切ろうとしたときだ。アメリカは和平の試みをことごとく潰した。その後、タリバーンはみるみる勢力を拡大し、勝利が視野に入ってきたため対話のインセンティブは失われていった。

定点観測と関与観察。

私がアフガンに行った理由

JVCは、アフガニスタン戦争が始まろうとする緊迫した時期に、いち早く戦争による解決は復讐の連鎖を生むとする戦争反対声明を発表し、街頭での反戦デモにも参加した。

開戦後は、アフガニスタン国内避難民への緊急医療支援を開始。私は戦争が始まった時点で、当時の事務局長職を辞してアフガニスタンに行くこと決めていた。世界のほとんどの国が賛成したこの戦争を、アフガニスタンの現場で、アフガン人の視点で見つめたいと思ったからである。戦争の実態と意味は関与観察することで見えてこないと思った。

まず指摘したいのは、米軍と多国籍軍による民間人への殺傷、アフガニスタン



2008年米軍ヘリから簡易ロケットが落とされJVCクリニックの境界壁が破損した事件で米軍に抗議するザビルラ

の文化を無視した家宅捜索や拘束、拷問が人々の外国軍への反感につながったことだ。スタッフの親族にも犠牲者は少なくない。タリバーンによる自爆攻撃や仕掛け爆弾による犠牲者も同様に多かったが、反感は外国軍により強く向けられて

いくのが手に取るようにわかった。

そして、「アフガニスタン政府も自分たちを守ってくれない」と思いつめた若者が何千、何万とタリバーンに合流した。復興の恩恵は都市と一部の人間に偏り、農村部の生活は戦争以前に比べても厳しさを増していた。一方タリバーンに頼ればケシ栽培による収入も含め、ある程度の生活が保障される面があった。こうした状況に対し、国際シンクタンクSENLIS評議会の06年レポートは、アフガン人の間に「被占領意識」が広がっていると警告を発している。

批判・静観する国際社会、 ドアを叩き対話する現場

政権の座についたタリバーンに対して、国際社会の批判の声は鳴り止まない。自分たちが仕掛け、あるいは容認してきた残忍な対テロ戦争のことを忘れたかのごとくである。

そんな中、現場ではタリバーンのドアを叩き、すでに対話を始めている。JVCの元スタッフが設立したYVOのザビルラ代表は、事務所のあるナンガルハル県の新知事のもとをいち早く訪問し、対話のパイプを開いた。アフガニスタンのNGOの連合体ACBARジャラバード事務所を巻き込んでタリバーンのNGO



アフガンから来日したときのザビルラ

コミッションとの会合も行った。

9月上旬、ナンガルハル県の行政府からYVOに女性の識字教育活動の許可がでた。ザビルラが当局と交渉を重ね、文書で許可を取り付けた。しかも女性スタッフの活動への従事も認められた。YVOはすぐ女性教師のリクルートを開始した。

画期的なことである。8月の県NGOコミッションから全NGOへの通達にも医療と教育の分野に限って女性スタッフの就労を認めるとあったが、実行が危ぶまれていた。公教育ではなく、成人女性のエンパワーのための識字教育が認められたことも以前では考えられないことだ。

対話の真価が問われる

9月7日、タリバーン暫定政府の閣僚が発表された。副首相に穏健派で知られるバラダルがいる一方、もう一人の副首相に安保理制裁対象のアフンド師がおり、内相に強硬派のハッカニ・ネットワーカー(HQN)の指導者でアメリカが指名手配するシラジュディン・ハッカニがついた。さらにHQNの幹部2名の閣僚入りを考えると、決して楽観できる状況ではない。

早速、メディアのネガティブ報道が始まった。それでも国際社会は対話の扉を叩き続けなければならない。タリバーンが国際社会の基準に歩み寄るか、アフガニスタンの人々を人質にした形で凶暴化するかは国際社会の対応にかかっている。

ザビルラの次の言葉は、対話を続けてきた市民社会の真の強さを示している。「対話のパイプを閉ざしてはいけません。対話しながら、関わりながら変えていくことができるはずですよ。私たちが地方でやったように、一つ一つの新しい成果がタリバーンを変えるはずですよ。地方でできたことは中央にも影響するはずですよ」

「特集」終了する事業から見るJVCの歩み(アフガニスタン・イラク編)

対テロ戦争の標的の国で 同じ現実を見て、学び 武力に拠らない 平和構築運動を 市民がつくり上げた

2002年に始めたアフガニスタン事業と、03年に始めたイラク事業は20年度で終了した。両国はアメリカの対テロ戦争の対象国だが、JVCは、戦争や紛争を未然に防ぐための活動に力を入れた。

アフガニスタンでは、医療支援をとっかかりに村落社会で信頼関係を構築し、平和アドボカシー活動を展開。それに共感した現地スタッフが、武器に拠らない平和構築を目指すNGOを立ち上げた。イラクでは、異なる民族や文化をもつ子どもたちが共存するためのプログラムを実践していたNGOとの協働の下、JVCはその対象を親にも広げ、紛争で心に傷を負った子どもたちのケアを行った。

JVCが去った今、両国では現地NGOが引き続き活動を実践している。
今年6月8日、「JVC会員のつどい」で開催されたオンライン座談会において、現場に初期から関わってきた2人の元スタッフに時間の限り語ってもらった。

座談会参加メンバー

長谷部 貴俊 (はせべたかとし)



他のNGOでカンボジア駐在などを経て2005年、JVCに入職。東京事務所アフガニスタン担当。08年からはアフガニスタン現地代表を兼任し、現地での事業運営や政策提言に関わる。12年から事務局長。20年11月、退職。現在はJ・M・NET(日本イラク医療支援ネットワーク)で海外事業担当。著作は「テロとの戦い」とNGO(中野憲志編著「終わりなき戦争に抗う」新評論、2014)など。

谷山 博史 (たにやまひろし)



大学院在学中にJVCにボランティアとして参加。86年からスタッフとしてタイ・カンボジア国境の難民キャンプで活動。以後タイ、ラオス、カンボジア、アフガニスタンに計12年間駐在。東京では事務局長と代表理事を20年務める。15・19年は国際協力NGOセンター(JANIC)理事長。NGO非ネット発起人など多数のネットワークに関わる。著書に、「積極的平和主義」は紛争地に何をもちたらずか? (編著、合同出版)、「非戦・対話・NGO」(編著、新評論)など。現在、沖縄県名護市在住。

司会

藤屋 リカ (ふじやりか)



広島市で保健師として勤務後、NGO駐在員としてパレスチナ母子保健事業に携わり、2002年にJVCパレスチナ緊急医療支援に参加。04年、JVC入職。パレスチナ事業による子どもたちの栄養改善、保健、収入創出等を担当。11年より大学教員。主な著作に「日本の医療支援」パレスチナに根づいた支援、「変遷する障害者福祉」誰も置き去りにしない社会に向けて(白枳陽・鈴木啓之編「パレスチナを知るための60章」白石書店、2016)など。慶應義塾大学看護医療学部准教授。JVC理事。

とにかく開戦させない

藤屋 アフガニスタン、イラクでのJVCの活動を振り返る座談会を行います。まず、なぜ両国に関わったのか。9・11後の対テロ戦争の流れにJVCはどう動いたか、もしくは、何に動かされたかについて伺いたい。

谷山 2001年9月11日のニューヨークのビル崩落の映像があったとき、テレビのニュースが「パレスチナ難民が大喜びしてはしゃいでいる」と放映した。あたかもアメリカが攻撃されたのを歓迎しているような映像だった。あの頃は事務所も、対テロ戦争に行こうとする世間の雰囲気切迫感を覚え、何とかして戦争に至らぬよう、声明を出す、いろいろなデモに参加するなど、できる限りの活動をやった。

10月8日にアメリカがアフガニスタンへの攻撃を始めると、世界中が参戦し支援した。そして、タリバンから逃げてきた難民が来るのを世界中のNGOが国境で待っていた。でもパキスタン政府が国境を閉じたから、実際は100万人以上が国内避難民となり、現場はアフガニスタン国内にあると知った。

JVCは、02年、現地のNGOのOM



イラク。ピースヤードに参加する子どもたちとINSAN代表アリ氏(前方右)、スタッフのラミア氏(前左)、JVCスタッフ(中央池田、左奥長谷部)

ARを支援する形でモバイルクリニックを開始。その後は、JVCが独自に各地のクリニックの支援や直接運営するに至った。医療活動を始めたのは、村の中に入っているから。社会状況、宗教、文化も違う中で活動するには住民からの信頼獲得が必要で、医療活動は最適のきっかけだった。

藤屋 03年にイラク戦争が始まる。それにもJVCはアクションを起こしませんでした。

谷山 アメリカがアフガンの勢いでイラクを攻撃する可能性は国際社会で取りざたされていた。JVCはとにかく開戦させない、少なくとも日本政府に関与させないと、02年7月にNGO非戦ネットを立ち上げた。

イラク戦争前の02年、JVCは戦争を予防するためのアドボカシー的な活動ということで、イラクの子どもたちとの絵画交流をやり、その絵を紹介しながら、日常的なイラクの人たちの素顔をとにかく発信した。開戦はこの人たちに危険をもたらすんだと訴えた。

戦争ではない形での解決がある 平和構築運動

藤屋 次のテーマに移ります。緊急支援から始め、しだいに地域に入り、武

力に拠らない平和構築で演じたアドボカシーの役割を深堀りしたい。

長谷部 イラクでも現場支援と並行してアドボカシーを行った。自衛隊を人道復興目的でイラクに派遣したとき、JVCは反対の声をあげ広く訴えた。ところが、私たちのような現場型の国際協力NGOで、日本や欧米も含めて、対テロ戦争に対して「おかしい」と言い続けてきた組織は非常に少ない。

谷山 現場で活動するNGOは、戦争のことなんて考えていない。戦争を止めるなんて鼻から思っていない。限られた状況のなかで何ができるかの専門家集団になっている。

明日には戦争になるという危機的状況では皆が戦争に流れるが、その前前に、戦争を作る要因を見抜き批判するのが大切。戦争ではない形での解決を求めるメッセージをJVCはもっていた。

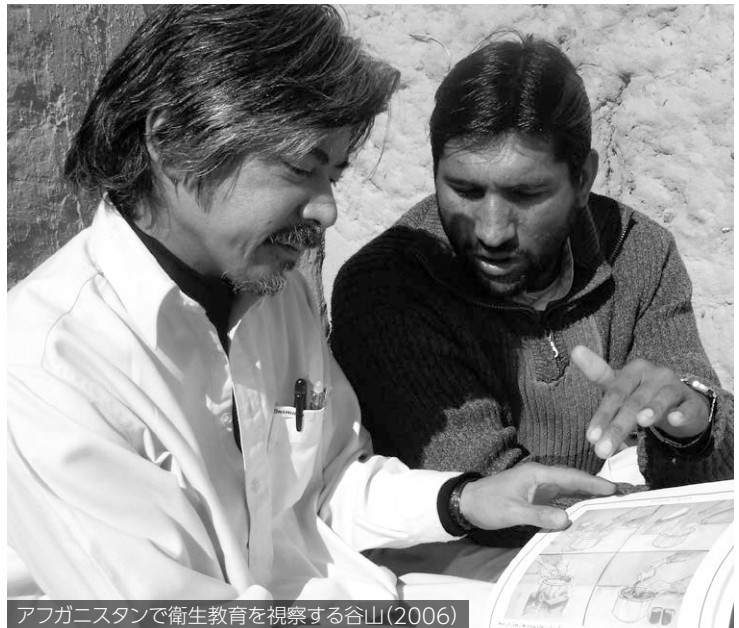
現場でも同じことが言える。

アフガンでは、医療活動を通して地域との関係性を作った。その過程で起きたのが米軍によるPRT(地域復興チーム)による事件。これは「軍による人道援助」のことで、軍はある日突然、大量の金品をもってやってくる。僕たちのクリニックも米軍に占拠され、診察もせずに勝手に薬が配られた。射撃訓練も行われた。

僕たちは、米軍を敵視する武装勢力から「お前ら、米軍の仲間だったか」と誤解されるのでは、攻撃されるのではとの危機感を抱いた。

長谷部 PRTはアフガン全土で展開した。ひどい時は、お金を空からばらまき人心掌握しようとした。さらに、08年と09年は、外国軍による誤爆、誤射で一般人が多数殺された。我々のスタッフの親戚も誤爆で殺された。で、私たちの支援活動を確保するために、「PRT活動はNGOができないところだけに限る」との縛りをつけるアドボカシー展開をした。私たちは、国連、ISAF多国籍軍、アフバル(アフガニスタンのNGO連合体)も巻き込み、軍による人道支援の基準を作らせた。

このとき、米軍との会議に、JVCのスタッフのサビルラも参加するが、この会議の結果、一時的であれ、空から一般人を撃ったり支援地のクリニックにやってくることは停まった。その結果、村人からの信頼も得た。すると、それを目の当たりにしたサビルラが変わった。かつて彼は、武力が解決の最終手段と信じていたが、「話し合いで解決できるんだ!」と、のちに彼が立ち上げるNGOであるYVO (Young Voice Organization 注1)のスタッフたちにもその考えを浸透



アフガニスタンで衛生教育を視察する谷山(2006)

させたのは大きかった。
藤屋 一方、イラクではその逆で、すでに先駆的な活動をしていた現地の人たちから学んでいますね。

谷山 僕たちは、戦争直後から医療支援を中心に活動していた。平和構築運動をする契機となったのは、キルワークで活動していたNGOインサン(INSAN)の阿里さんとの出会い。インサンは課外授業としてお絵描きやスポーツ活動をしていたが、これを異なる文化背景をもつさまざまな民族の子どもたちが互い

を理解するための平和ワークショップにしようとした。平和ワークショップ(注2)も6、7年続き、最終的にはピースヤード(注3)という形で活動を終えた。

藤屋 キルワークでは、異なる民族の方々に活動を展開したのでですね。

長谷部 私は13年にインサンのスタッフと現地地で会った。それ以前に阿里さんの来日時に話し合った「異なる民族が共存するには何が必要なのか」についての現地調査だった。4つの民族

がいるが、子どもたちは、違う民族というだけで石を投げたりケンカをする。「どうして?」と聞くと、「お父さんが『あいつら悪い民族だから』と。子どもがそういうメンタリティーになってしまっている。これは大人たちも巻き込まねばと思った。ピースヤードは、地元ケーブルTVも取材し、何十万人も見ると番組で配信された。政治が作り出した宗派対立のなかで、こんな取り組みができるの事実是非常にインパクトがあったと思う。

今の時代だからこそ
現場に張り付こう

藤屋 最後の議題は「事業終了とその振り返り」だが、現役のスタッフの声を聴きたいとの会員が多いと思うので、まず、代表の今井高樹さん、南アフリカで活動してきた渡辺直子さんのご意見をお願いします。

今井 JVCが平和構築において特定の手法をもっていたというより、現地の人々のインシアチブを活かしたのが大きかった。現場で顔を突き合わせて考え、何が起きているかを見るのはとても大切で、治安の問題で何年も訪問できないのは残念だった。それが事業終了にもつながった。

渡辺 私は最近、ビルマ/ミャンマーの問題に関わっている。ここでは、JICA(国際協力機構)のプロジェクトも、そしてJIBC(国際協力銀行)の融資での民間プロジェクトも国軍への利益流入を引き起こしている。私たちは、日本企業のキリンと軍関連企業とのビジネスが国連の報告書にも出ていたので、キリンとも面会し、そういう企業活動をやめるよう訴えてきた。そういうなかでクーデターが起きてしまったが、私たちは少なくともクーデターという事件が起きる

◎注1…YVO。JVCアフガニスタン事務所の現地スタッフが立ち上げたローカルNGO。これまで、地域社会で武力によらない対話のワークショップや成人女性を対象とした識字の活動を実施している。◎注2…平和ワークショップ。キルワーク市で開始した、子どもたちが民族や宗教の壁を越えて交流しながら平和共存を学ぶ内容。異なるバックグラウンドの親の交流も行われた。



アフガニスタンでの村の保健員との打ち合わせ(中央、JVCスタッフで医師のワバーブ。右、長谷部)

前から警鐘を鳴らしてきた。今のお二人の話も聞いても、JVCの役割はそういうところが強いのかなと思う。

長谷部 アフガンとイラクの事業を終了するが、私は退職した今も、アフガンの市民社会のリーダーのかたがたとお話ししている。12年、谷山さんが代表となり私もコミットしたCSO会議(注4)で来日した32人のアフガン人の多くは、昨年後半から、タリバンから武装集団からかの被害を恐れ、国外に避難した。電話の盗聴を恐れ、メールだけのやりとりにするとか、自宅で息をひそめる方が多い。

アフガニスタンは、今後どうなるのか。JVCのネットワークで、必要な時に声を出すためのサポートを一緒にやるのはあってもいい。対テロ戦争は終わっていないんです。

谷山 やはり現場の力はとても大きい。現地の人、NGOのイニシアチブを支援するのは大切だが、その場で同じ現実を見て、悩んで、外にいるだけでは見えない、報道からは見えない、その場にいることで見える意味をつかみ取る。それができないと、何が起きているのか、何が問題なのか、どういう成果が本当の意味を持ったのかが残念ながら見えない。

これからの時代は不確実性が高くなる

だけに、余計に、人が現場に張り付くことが求められる。現場にすることで、問題の構造が判り、希望も見えてくる。

長谷部 YVOやインサンがやっている草の根の取り組みは非常に重要。和平交渉という、国の偉い人が出てきて「隣国が…」と話す、一般市民に落ちない話だ。たぶんアフガン人は国家を意識するより「タリバンが来た時に助けてくれ



イラク。ピースヤードの光景

るのはシユウラ(村の長老を中心とした評議会)だ」と答える。アフガンでは警察の性暴力がひどいと報告もあるし、司法も全然機能していない。解決してくれるのは、村レベルでの長老たちの交渉がほとんど。そういう社会状況で、「平和構築」を「すごい」、「大切だ」と思ってくれるまでもっていききたい。それはイラクでも同じだと思う。

藤屋 YVOが現地法人化までいったことについて、谷山さんはどう思う？

谷山 僕たちは、サビルラとは現場で一緒に15年仕事した。そのうえで飛び立っていった。その形はどうしても必要。外から入って、突然NGOを作るのはあり得ない。一緒にやっている人たちが互いに学び、互いの組織文化など、たくさん掴み取りながら育つ。僕たちはこれだけのポリシーと信念を持って成果を積み重ねているYVOを側面で支える。もちろん支え方を間違えるとダメになるので気をつけるけど。

今井 谷山さん、長谷部さん。そして司会の藤屋さん、本日はありがとうございました。

◎注3…ピースヤード(平和の広場)。15年からは避難民の子どもたちも受け入れ、平和ワークショップに精神的に傷ついた子どもへのケアも加えて実施した。
◎注4…CSO会議。2012年、国連や米国、さまざまな機関・政府が参加したアフガニスタン復興会議の東京開催に合わせ、アフガニスタンから30名超の市民社会メンバーが来日開催された会議。谷山と長谷部は日本側中心メンバーとしてコミットし、アフガニスタンに関わる多くの日本のNGOからも提言を展開した。

最後の活動となった識字教育が女性たちにもたらした誇り

運営してきた診療所を2016年に現地NGOに移管後、アフガニスタン事業は地域教育(識字教育)と平和構築(ピースアクション)活動を実施した。19年はJVC現地事務所がアフガニスタン人による団体Your Voice Organization(YVO)として独立。ピースアクションも20年に元JVCスタッフが設立した「平和村ユナイテッド」とYVOとのパートナー事業として継続された。JVC最後の活動となる識字教育の実施は18~20年度までの3年間。終了にあたり、JVCはYVOと協力し、活動参加者への聞き取りを含めて活動の評価を実施した。そこから見えたことを報告したい。

JVC代表 今井 高樹

な変化をもたらした。ある参加者は「幼い頃、学校に入りたかったが戦争や移住のため通えなかった。母親になり、息子が勉強を教えてほしいと言ってきた時に助けてやれず悲しかった。識字教室で学んだ今は、子どもたちの勉強を助けることができる」と話している。

教育の重要性を村人に伝える啓発セッションには年を追って参加者が増え、最終年は合計300人以上が参加。識字教室の教員・参加者が自ら寸劇を上演して教育の大切さを訴えた。「啓発セッションを見た母親の意識がすっかり変わり、識字教室を終えた私を正規の学校に入学させてくれた」と話す参加者もいた。

参加者だけでなく、教員を担った女性たちもコミュニティの中で認められるようになり、自分の社会的地位が向上したと感想を述べている。

このように、識字教室は参加者の生活だけでなく、地域社会における教育、特に女子教育に対する意識を変えられることができた。

活動は現地NGOが引き継いだ

JVCは、この活動の終了をもって2002年に開始したアフガニスタン事業を終了した。現地ではYVOが今後も識字教育を継続していくが、資金調達など組織運営面での課題は多い。それはYVOの独立前後にキャンペーンビルディング(能力強化)を十分にできなかったJVC側の責任でもあると認識し、YVOには引き続き関わりを持っていきたい。

意識改革をもたらし成人識字教室

アフガニスタンでは、紛争、移住、文化的側面など様々な理由から教育を受けられずに成人する女性が多い。JVCは15~50歳のそうした女性を主な対象に成人識字教室を開設した。

現地の文化的背景から、女性が識字教室に通うことは容易ではない。しかし、

長老たちから識字教育の必要性について理解を得て、村の中に教室を開設し、村内で選抜した女性たちに教員となってもらうなどの工夫を重ね、多くの女性の参加を得た。3年間に9カ所のコミュニティで31教室(女性26、男性5)を開設。912名の参加者のうち9割が9カ月のコースを終了し、州教育局から修了証(小学校3年生の教育に相当)を受け取った。識字教室は参加者の生活や意識に大き



教育の機会から遠ざけられていた村落社会の女性たちにとって、識字教育は自分の自信を得るための作業でもあった



スタッフ作業机の様子。
左は伊藤事務局長、右は今井代表理事

現地事務所へ

間取りから見るワーク&ライフ

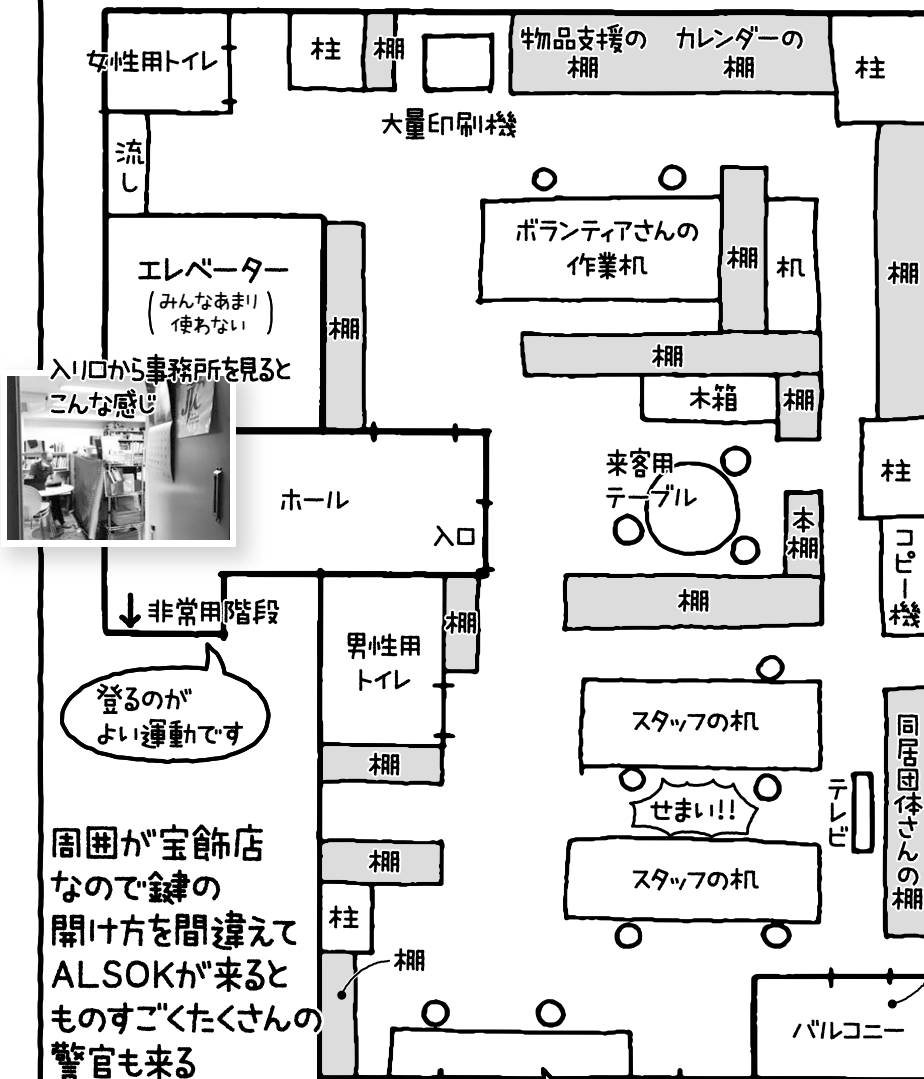
ようこそ!!

vol.08
東京編

JVCIは9/1から新しい事務所にお引越しました! 最近やっと使い慣れてきた新事務所の様子をお届けします。

JVC東京事務所 見取り図

↑ たまに猫が現れるという噂の路地裏



JR御徒町駅から徒歩3分

以前のオフィスの1/3サイズになりました。その狭さに「湯島時代みたい... (1990年代)」というOB,OGも。

とにかく棚だらけ



左奥にカレンダーと物品支援の棚

今井代表理事の癒しスポット (たまにたそがれる)



ベランダでたそがれる代表理事

登るのがよい運動です

周囲が宝飾店なので鍵の開け方を間違えてALSOKが来るとものすごくたくさんの警官も来る
(引越した後1カ月で2回呼んでしまった)

セキュリティはバッチリ...

周りのビルが近いので目の前のオフィスの人と目が合っちゃう

世界各地をめぐってきた事務所紹介は、今回が最終回です。編集部では次の連載企画を絶賛考案中。どうぞ楽しみに!



2014年、8年ぶりにピョンヤンでの「ともだち展」が実現した。地元メディアにも大きく注目された

[特集]ともだち展20年 活動の意義

厳しい状況でも、 会えなくても、 絵で心をつないだ20年

朝鮮民主主義人民共和国（以下、朝鮮）、大韓民国（以下、韓国）、在日コリアン、日本の子どもが絵を通し交流する絵画展「ともだち展」が20周年を迎えた。この間、朝鮮と韓国との軍事的緊張、米朝関係の悪化、新型コロナウイルス蔓延など、自由な往来を妨げる事案も発生した。それでも「ともだち展」が続いたのは、4地域の関係者が「子どもたちのため、厳しい状況だからこそ交流しよう」と願い続けていたからだ。「ともだち展」は子どもたちに何をもたらしたのか。20年を振り返る。



コリア事業担当
宮西 有紀

ち展」を01年6月、東京都でスタートした。

ともだち展は、「できるところから」出会いと交流の場を広げてきた。直接ピョンヤンに赴き、そこで見聞きする子どもの素顔や現地の人々の声を日本社会へ発信する、という役割がNGOにはある。日朝関係の悪化や南北緊張などの情勢変化があっても「直接会うこと」は大前提だった。

現地でもともだち展に対する期待を感じたのは14年。日朝関係改善の兆しを受け、8年ぶりにピョンヤンでのともだち展が開催されたときだ。会場にはたくさん子どもや現地報道陣が待ち構えており、ともだち展の様子には国営の朝鮮中央テレビで放送された。その受け止められ方に大変驚いたことが記憶に残っている。

政治的緊張関係のなか だからこそ訪問を敢行

それでも東アジアが一番緊張した15年と17年は忘れられない。15年8月、韓国側の非武装地帯で朝鮮が埋設した地雷が爆発し、韓国軍兵士2人が重傷を負った事件に端を発し、朝鮮は22年ぶりに前線地帯に準戦時体制を宣布した。

その8月、訪朝団がピョンヤンに到着

朝鮮でも歓迎された 子どもたちの絵画交流展

朝鮮に大きな被害を及ぼした95年の大雨洪水被害への緊急支援に取り組んで以来、JVCは他のNGOとネットワークを組み、子どもたちへの人道支援（主に食糧支援）を行ってきた。だが、朝鮮からのミサイル発射などで日本の世論が一気に厳しくなり、徐々に人道支援への理

解を得ることが困難になっていた。

99年2月、人道支援に取り組む日韓のNGOが集まる場で、韓国の団体オリニオックドムによる南北の絵画交流を知ることとなる。東アジアで平和の輪を広げるには相互理解が大切と思っていたことで、朝鮮、韓国、在日コリアン、そして日本の子どもたちが、絵を通して出会い、互いを知るための絵画展「南北コリアと日本のともだち展」（以下、ともだ



2017年、日本人学生のビデオメッセージに見入る平壤外国語大学の学生たち

すると、受け入れ機関の人から朝鮮外務省の声明文が配布され「現状の理解を」との説明があった。板門店や開城への訪問はできず、市内散歩や写真撮影も制限。市内の風景はいつもと変わらなかつたが、「日朝大学生交流」に参加した平壤外国語大学の学生たちは「戦闘体制になつたら入隊志願する運動に署名した」と覚悟を見せつつ、「これほど緊張が高まった経験はない」との本音も漏らした（その後、南北が合意し、準戦時体制は解除）。

17年1月、アメリカでトランプ大統領が就任すると采朝関係が一触即発状態となる。8月、私たちのピョンヤンへの出発の1週間前には「不要不急の渡航は控えるよう」と外務省から事務局に連絡が入り、また、同行予定だったメディアは会社の判断で訪朝を中止した。

私たちもギリギリまで議論を続け、「緊張関係が高まり、朝鮮の脅威がメディアで喧伝される時期だからこそ、往来が可能な限りの訪問することが重要」と、学生を除き事務局だけの訪朝を決めた。

このとき会った平壤外国語大学の学生は、日本語学習に大変熱心で訪朝団の通訳にも選ばれていたが、日本人学生のキャンセルで同行できなくなり、大変失望していた。訪朝予定だった日本人学生からの手紙や羽田空港で急遽撮影したビデオメッセージを見せると、「そんなに遠い国ではないでしょう？ 我が国を知りたいと思う人たちが、空港まで来て涙を流して、こうして写真（やビデオ）で

会うことができるのに、残念でなりません」と話していた。

コロナ禍でも交流は続く

一方で新たな試練となったのが「感染症」だ。20年、中国や韓国からの子どもたちの来日予定が、新型コロナウイルス感染症の大流行のため実現しなかった。同じ理由で、20年8月、ともだち展でのピョンヤン訪問も初めて断念した。

それでも私たちは交流を続けた。今年2月のおおさか展では、オンラインで韓国の子どもたちとの交流が実現。6月に開催した20周年記念絵画展の際には、作品の受け取りを諦めていたところ、朝鮮側からの提案で、インターネットを通じて絵画作品が届くことになり、新しい絵画も展示できるようになった。

また、朝鮮をはじめ、各地の協力者やともだち展卒業生から20周年へのお祝いメッセージも届き、いかに、ともだち展が卒業生たちに鮮明な記憶を刻んだかをうかがえた。

20年を振り返ると、ともだち展は、朝鮮をはじめ、韓国、中国、日本、在日コリアンの関係者が「子どもたちのために」と力を合わせたからこそ実現し、何よりの子どもたちが交流を楽しんだからこそ

続いた。

偏見のない「真っ新な」子どもたちは、初めて会った外国人とも言葉ではなく「楽しい」から仲良くなれ、そうしてできた新たな「ともだち」を通して相手を理解する。17年にピョンヤンの担当者「子どもたちに教わったことは忘れない」と言ったが、それがともだち展を実施する理由に他ならない。

20周年の節目を迎えた今、会えないからこそ「絵で心をつなぐ」という原点に回歸しつつ、今一度立ち止まり、今後のともだち展についても、新しいスタイル・新しい展開の可能性を模索していきたい。



第1回南北コリアと日本のともだち展「あなたのことをおしえて」(2001年)



子育てや労働の合間に作業することができるドライハーブづくりは、出稼ぎに出ずに村に残る女性たちの貴重な現金収入となった

[報告]カンボジア・生業改善プロジェクト終了 ■■■■■■

プロジェクトが終了しても 住民の実践は続く

JVCは、2007年にシムリアップ州東部で活動を開始。15年10月からの「生業改善プロジェクト」は住民のフードセキュリティ強化を主目的とし、食品加工や多年食用樹の活用など技術支援を実施した。18年度に実施した評価では一部課題が残ったことから、19年4月以降を「延長フェーズ」とし、水へのアクセスの改善や外部販売支援を行い、21年3月にプロジェクトを終了した。同時に、JVCは1980年から続いたカンボジア事業も終了した。今回は延長フェーズについて報告する。



カンボジア事務所現地代表
大村 真理子

住民の自信につながった 延長フェーズ

生業改善プロジェクトの対象地域では、これまでの活動を通じて食料確保手段や食料資源の多様化が見られ、JVCの実施する農業研修に意欲的な住民も多く、研修参加者の7割以上が食品加工や食用の多年生植物の栽培を開始するなど、一定の成果を得ていた。

一方で、「実践できるのは水へのアクセスが比較的容易な人たち」に限られ、水の確保が困難な住民は、生業強化のための研修を実施・提供しても、実践が始められないなどの課題が残されていた。

そこで延長フェーズでは、家庭菜園研修と並行して、改めて水源の調査を実施し、ため池と井戸を掘削した。同時に、既に家庭菜園が軌道に乗っており自家消費用のほかに外部への販売を希望してい



ハーブの売上を出し合っため池に汲み上げポンプを購入した女性たち。暮らしを自らの手でどんどんアップデートしていく姿に、こちらも刺激された

る住民に対しては、村にいなから現金収入を得られるきっかけづくりを行った。

具体的には、シムリアップ市街地の飲食店や、車で5時間程の首都に工房を持つハーブティーブランドと提携し、野菜や加工品の生産、出荷を行った。その結果、2年間で薬物や香草、ハーブティー用のドライハーブの出荷までを住民自身で行えるようになった。卸先が何度も生産者のもとを訪れ、「生産者の顔や畑の様子が分かるのが安心」「国産の無農薬が貴重」という声を届けたこともあり、これらの経験は住民の自信にも繋がったようだった。

コロナ禍でも 維持するしなやかな生活

新型コロナウイルスが流行し、卸先の



JVCの農業関連書籍を引継ぎ、村に唯一のブックカフェをオープンしたスタッフのポク

飲食店が休業となった時には、住民自身で価格や品目を調整し地元での販売に切り替えるなど、外部状況の変化にしっかりと対応する姿もあった。野菜やドライハーブの出荷は現在も住民たちの手で続けられている。

「売上が安心感につながる。これまでタイで出稼ぎ中の息子からの仕送りをあてにしていたが、今は依存せずに済んでいる(50代女性)」という声や、「野菜が売れるようになり、コロナで収入が安定しない娘に私が仕送りすることもある(40代女性)」という声が聞かれている。

この2年間で、家庭菜園に取り組んだ227の全世帯が「生産量が上がった」と回答した。研修参加前に平均約2種類だった生産品目は、約13種類になった。

「寝て起きて食べるだけの暮らしが、今は食べ物も収入もあり、農業のやり方を尋ねに来る人もいる。それが嬉しい」という女性や、「野菜が上手にできて、販売までできるようになった。『あそこの畑がすごいから見に行こう』という人も現れ、村の中で存在が認められていると感じます」と語る男性の話や、JVCの活動が食(農)を基盤に村の有機的な繋がりの活発化に貢献した一面もあったように思う。

コロナの影響で出稼ぎから戻ってきた人の中には、「勤務先の休業で、やむなく村に戻ってきた。かつてJVCの研修で学んだ家庭菜園を再開した。昔学んだ技術が今、役に立っている」という女性もいた。JVCが続けた研修技術や知識は、こうした非常時にいつでも取り出せるお守りのような存在にもなっている。

事業は終了するが、住民は「実践を続ける」

21年3月。本プロジェクトは終了した。住民からは「JVCがいなくなっても、ここにJVCがいて、日本からの支

援者がたくさんいたことを伝え続けた。そのためにも、まずは自分が実践を続ける」との力強い言葉を聞くこともできた。

事業地出身のスタッフ・ポクは、6月に長年の夢であったブックカフェを村に開いた(上写真)。「自分が小さい頃、本に触れる機会がなかった。子どもたちが気軽に寄って、知識を得る場所を提供したい。JVCで得た経験を次世代に還元したい」と語る。

プロジェクトや事業の終了、評価のタイミングとは関係なく、人びとの暮らしは続いていく。数年後に花開く活動成果があるかもしれないし、現時点で順調に見えることがうまくいなくなることもあるだろう。プロジェクトは終わり、同



ため池掘削場所を決める村内会議は、小グループに分かれての議論と、それを持ち寄り全体会議を重ねた

時にJVCのカンボジアでの活動も幕を閉じるが、今後も一人の人間として、お世話になったこの地域と繋がりを続け、プロジェクトを超えた関係を築いていきたい。

本部からの異動で駐在員となり、丸3年が過ぎた。日本から見ていた以上に、ここにはたくさんの涙や笑いがあり、逆境を諦めることなく進む人びとの強さがあった。「JVCが来て人生に楽しいことが増えた」と語る女性の笑顔と涙が忘れられない。

NGO活動は小さな小さな積み重ねで、大きな変化を急に起こすことはできないのかもしれない。しかしその積み重ねが、誰かの人生を大きく変えることがあるのだと、何度もその瞬間を自分の目で見た。大きく流れを変えることは大事だけれど、すべてではない。顔の見える関係を築けるNGOだからこそその活動を、これからも続けていきたい。

お知らせ

カンボジア事業40年の歴史をまとめた映像を有志で制作しました。QRコードからご覧ください。

JVCのYouTubeチャンネルが開きます

同梱のチラシもご参照ください



JVCは現在、5の国・地域で活動しています。

プロジェクト一覧

6月後半～9月前半

スーダン・南スーダン

紛争による被災民の支援(スーダン)
／スーダン難民の支援(南スーダン)

●紛争による被災民の支援(スーダン・南コルドファン州カドグリ郡)：7月、不就学児童のための補習学級の修了試験を291人が受験した。合格率は96%と高く、合格点に達しなかった児童も含めて修了者全員が新学期(9月下旬)から正規学校に編入できるよう、行政や学校との調整を行っている。修了式は各コミュニティで盛大に行われ、喜びを分かち合い、教育の重要性を人々に啓発する場もなった。

8月からは就労していない避難民地区居住の若者を対象に職業訓練を開始した。縫製、食品加工、溶接、自動車修理工(トゥクトゥク、三輪バイク)の

4職種に119名が参加している。技術を習得するだけでなく、ライフスキルトレーニングを通して社会で生きていく力を身に付ける。

●イダ難民キャンプでのスーダン難民支援(南スーダン・ルウェン行政区)：南スーダン全体で経済状況の不安定さから、物価が以前にも増して高騰しており、人々の生活苦は悪化している。

2020年度はコロナの影響で幼稚園が閉鎖していたため、2021年度は雨季(通常8、9月は長期休暇)の間も幼稚園の運営を継続している。7月末時点で幼稚園の登録児童は全18園で2,480名。8月上旬には年長クラスの



新しくできたAlawa6幼稚園。まだ校舎はなく、地面に直接座り、英語や算数を学ぶ(イダ難民キャンプ)

985名が卒園式を迎えた。また6月に幼稚園で使う備品や学用品(黒板、ノート、ペン、教科書など)の調達を行った。

家庭環境により保護が必要な児童たちの就学支援については、33名が就学を継続し、給食支援、土曜日の補習クラスを受けている。支援児童のうち10名程度が各学校での成績優秀者に選ばれ、うち1名は中等学校で学年1位を獲得するなどの成績を収めた。

(小林)

ラオス

農業・農村開発／土地森林保全事業／洪水被害支援(サワンナケート県)



研修で苗木とする果樹の一部を切る村人

9月終了の現行プロジェクトは最終盤に入り、残る活動や現地行政への引き継ぎの作業を進めた。6月には5村に対して果樹の一部を苗木として選び、定植する技術の研修を実施し、3村に各村の歴史や地図、自然資源の利用状況などのデータをまとめた冊子「村のデータ本」を配布した。7月から8月にかけて現行プロジェクトの最終評価のための住民からの聞き取りや活動引き継ぎのための話し合いを行い、同時に各村で自然資源の管理や住民の権利に関わる法令についての研修を行った。

なお、コロナの影響で、活動地では8月9日から感染者数の多い地域での外出、他地域への移動の禁止措置がとられているが、一部の活動については現地行政の許可を得て実施した。

並行して、南部セコン県での自然資源管理を中心とした新規プロジェクトを立案し、現地行政との交渉に入るべく作業を進めた。(山室)

コリア

絵画交流『南北コリアと日本のともだち展』／大学生平和交流プログラム



オリエンテーションでは、ほかの学生とも話ができるよう、少人数のグループワークを3回行った

『南北コリアと日本のともだち展』：6月6日に開幕した20周年記念絵画展。支援者や協力者などへの報告を行い、オンライン配信されたトークイベントは、YouTubeで公開した。また、8月7日～14日には熊本市中央区で3年ぶりに「くまもと展」が開催され、「協力」として関わった。(20年の活動については、本誌10,11ページを参照。)

●「東北アジア大学生平和交流プログラム」：関東・関西計14名の大学生と大学院生で、今年のプロプログラムがスタートした。

7月28日にオリエンテーションを開催し、プログラム説明、基礎情報のレクチャー、参加者同士の交流を行った。また、8月25日には「関東大震災と朝鮮人虐殺」をテーマにした第1回勉強会を実施。ともだち展卒業生の朝鮮大学校生がゲストとして参加した。

●その他：8月14日、韓国のオープンラッププロジェクトの研修プログラムでKOREAこどもキャンペーンがひとコマを担当、日朝交流の事例や意義などを発表した。(宮西)

パレスチナ

東エルサレムの女性と ガザの子どもたちへの 支援



リーダーシップ研修で指定された色の上で協力してボールを転がす青少年たち(東エルサレム)

●女性の生計向上とエンパワメント事業(東エルサレム): 引き続き、基本的人権やジェンダーなどの研修をシルワン・アットゥーリ地区の女性を対象に合計36回実施し、延べ384人が参加した。同時に、次世代を担う青少年の育成や男性の巻き込みをはかるため、彼ら・彼女たちを対象にした研修も合計39回実施し、延べ541人の青少年と51人の男性が参加した。研修受講前後でのアンケートによると、研修参加者の女性の権利やジェンダーの理解に対してポジティブな変化が現れ始めている。

●子どもの栄養失調予防と改善支援(ガザ): 戦争後の女性ボランティア向け心理社会ケア研修を実施し、被害者でもある彼女たち自身のストレス軽減の機会ともなった。戦争後のイスラエルによるガザへの物資制限の影響で、衛生キットと食料の調達は遅れたが、9月前半までに172人へ配布。啓発講習は10回開催し、計43人が参加した。410人の健診を行い、27人を専門機関へ照会。また、ワファ病院への緊急支援も実施。主に患者さんの医薬品や医療用消耗品などが購入された。(木村(万)、山村)

国内活動

日本国内での活動資金 調達/事務局運営など



クラウドファンディングのウェブページ。「未来を決める力をすべての人に」を合言葉に、ビジョンを伝える

●事務所運営: 8月下旬に新事務所への引越しを終え、感染対策に気を配り在宅勤務を継続。少人数での事務所出勤を続けている。新事務所のレイアウトは9ページを参照。

●カレンダー: 今年も9月1日からカレンダー販売を開始した。子どもたちの笑顔の写真が好評。詳細はぜひ裏表紙を。

●広報: アフガニスタン政変を受け、過去の活動や現地情勢に関し多数の問い合わせを受け、声明を発表。イベントを実施した。

●ファンドレイジング: 10月4日~11月19日にクラウドファンディングを実施するため、スタッフ一丸となって準備を進行(目標750万円)。寄付は団体全体に充てられ、全活動の下支えになる。「夏の募金キャンペーン」は現在までに700万円が集まっている(目標970万円)。また物品支援用の封筒を同封したところ、100万円分のご支援が集まった。これで物品のご提供による支援額は今年度560万円に。パルシステム東京様経由の物品支援も500万円に達し、大きな資金調達源の一つになっている。今後も封筒の配布先を探すなど、各所にご協力を仰ぎたい。(並木)

南アフリカ

子どもケアセンターの 運営支援



センターで給食を食べる子どもたち

親がいないなど厳しい家庭環境下に置かれた子ども(以下、OVC)に対し、1村で、OVCが通う「ムペゴ子どもケアセンター」との協働事業を行っている。センターは村の住民でもある「ケアボランティア(約12名)」が運営、約160名のOVCが通っている。

4、6月に実施したケアに関する研修(カウンセリング、虐待とトラウマ)の学びを活かして、センターに来られないOVCを家庭訪問、状況をフォローする計画だったが、7月から南アフリカ政府のロックダウン政策により州内移動ができなくなり、活動が停止した。8月に入りようやくセンターを再開、同月10日以降、1年以上ぶりにOVCたちが通い始めている。

ケアボランティアたちが、OVCが戻ったときにすぐ給食を提供できるようセンターの菜園を維持していたおかげで、地域住民や学校給食の余剰からの寄付を合わせて、日々センターでの給食を提供している。8月下旬からはセンターに通う10代のOVC約100名を対象に菜園づくり研修を開始し、9月上旬から開始した。(渡辺)

調査研究

外務省・JICAとの 政策協議/各種提言



8月2日、ビルマ/ミャンマーのクーデターから半年経ったことを受けて哀悼の会と路上アクションを実施

●ナカラ回廊開発: アフリカ・モザンビーク北部のナカラ回廊開発の一環で行われる石炭開発・鉄道整備事業と天然ガス開発事業において、被害や人権侵害が生じ、後者の事業地では紛争が激化している。これを受けて、状況の事実確認と対応を求めて、8月に開催された財務省・NGO定期協議(JBICも参加)において、議題提案、問題提起した。

●ビルマ/ミャンマー: 2020年5月以降「ビジネスと人権」の観点から、日本の他団体と協力しながら、ビルマ/ミャンマーで国軍とのつながりを持つ現地企業との提携解消を求め、日本企業に対する働きかけを行ってきた。2月1日にクーデターが発生して以降もこれを継続している。6月後半から9月にかけては、企業や省庁前で国軍との資金のつながりを断つことを求めたアクション、企業・政府との協議、イベント開催、声明発出などを継続した。

●その他: JICA環境社会配慮ガイドラインの改定案に対して今井・渡辺が、外務省によるモザンビークの国別開発協力方針に対しては渡辺が、それぞれパブリックコメントを提出した。(渡辺)

イベントあらかると

7月～9月

イベント・ピックアップ!

9/16(木) 敵視ではなく対話を通じた
アフガニスタン支援を(オンライン開催)

「地域に根差した活動から見た “対話”という選択肢」

収益事業インターン 池内 梨紗

8月31日、アフガニスタンでは2001年から駐留していたアメリカ軍が撤退し、タリバンが政権を掌握しました。これを受け、昨年までアフガニスタンで活動していたJVCは声明を発表しました。今回のイベントはJVCの活動を通して、今のアフガニスタンの状況を知り、今後のタリバンへの姿勢や私たちに何ができるのかをともに考える時間となりました。

イベントの冒頭では代表理事の今井さんから過去20年のアフガニスタンでの活動内容や今回の声明文について紹介がありました。この声明では、アメリカ占領下の検証・タリバンを孤立させないこと・日本の役割の重要性を強調し、一方的に「悪」とする危険性を訴えられました。それを踏まえ、以前JVCスタッフとしてアフガニスタンで活動し、現地代表も務められていた、前代表理事の谷山さんと前事務局長の長谷部さんからアフガニスタン情勢についての報告がありました。

谷山さんは、最初にアメリカ軍が駐留していたアフガニスタンの状況と、沖縄の状況は酷似していることを指摘しました。私自身、どうしても遠い国の話だと感じてしまいましたが、日本でも同様のことが起きていることに気付かされました。

アメリカの対テロ戦争への疑問も投げかけられ、何度かあった終戦のチャンスにアメリカ側は交渉に応じず、仲介できる立場であった日本も戦争に加担してきた過去を振り返りました。アメリカ軍が撤退した今も、タリバンと対話し、国際社会を仲介する役割が日本にあることを、私は再認識することができました。

また、アメリカ軍や連合軍による誤爆・誤射で多くのアフ



アフガニスタンでの活動中の写真とともに

ガニスタン人が犠牲となっており、家族を失った人が復讐のためにタリバンに合流している現実も伝えられました。対テロのための戦争であったにもかかわらず、テロを起こす動機を生み出してしまっていたその矛盾に、何とも言えぬ虚しさを覚えました。

沖縄の話にもあったように、自分ごととして捉えていく姿勢が広がっていき、市民社会から声があがれば、日本が対話し仲介する役割を担うきっかけとなるのではないのでしょうか。

長谷部さんは、声明の裏付けとなるような、活動に基づいた現場の声や現状を伝えました。さらに対テロ戦争後の、文化や地域社会を無視したアフガニスタン支援の検証の必要性を訴えました。アフガニスタン、特にタリバン政権下では女性へのアクセスが難しいとされ、女性の権利保障や差別が問題視されています。しかし、過去にJVCがおこなってきたように、事前説明をして地域住民に理解を得るなど地域の文化を尊重すれば、アクセスは可能であると言います。ここでも女子教育の承認を発表しているタリバンとの対話の必要を感じました。

お二方の話を聞き、その土地の文化に配慮し、現場の声に耳を傾け、対話し続けていくことの重要性を感じました。我々の基準で、どの政権が良いか悪いかと決めつけるのではなく、その地域に住む人々が何を必要としているかという視点も持っていかなければなりません。また今回このようなイベントに参加したことで、地域に根付いた活動で得た知見を発信し、市民に呼び掛けることの大切さを感じるとともに、NGOの役割や責任を改めて認識させられる時間となりました。

その他の主なイベント

7/1日(木)、8/2日(月) 東京・官邸前、

9/2(木) オンライン開催

#ミャンマー国軍の資金源を断つ

2月1日に国軍によるクーデターが発生して以来、一貫して日本政府および民間企業に対し、同軍への「資金源を断つ」具体的な行動をとるよう強く要請し続けている。

7/10(土)、9月18(土) オンライン開催

「近くて遠い国」をめぐる考える、

朝鮮ピーススタディツアー

朝鮮が問いかける「平和」と「未来」について宮西が登壇。

7/11(日) オンライン開催

壁で分断された国をめぐる考える、
パレスチナ ピーススタディツアー(第4弾)

7/17(土) 東京・シネマハウス大塚

映画『傍観者あるいは偶然のテロリスト』

上映会

大澤がゲストスピーカーとして登壇。

9/1(水)、28(火) オンライン開催

「パレスチナの声を聴く」

オンラインセミナー

大澤がスピーカーとして出演。

9/16(木) オンライン開催

敵視ではなく対話を通じた

アフガニスタン支援を

前代表の谷山氏と前事務局長の長谷部氏を招き、刻々と変わる現地の状況をどう見るかや、日本の役割、今後への提言などについて聞いた。

9/17(金) オンライン開催

緊急報告『危機が続くパレスチナと

支援の現場』

現地の人々への思い、パレスチナに関わり続けるということの核心について大澤が報告。

9/19(日) オンライン開催

オンラインだからこそ行けるツアー

(パレスチナ、スーダン/南スーダン)

現地駐在員の山村と山本が、日本では味わうことのないリアルをお届けした。

9/30(木) オンライン開催

短期インターン募集説明会@オンライン



ゆるゆる、 ほそぼそJVC

支援者担当アルバイト
石原 彩



はじめまして。支援者担当アルバイトの石原です。主に募金や会費のデータ入力・処理を行っています。今年で早4年目です。半日だけの勤務を週3日、4年目とはいえいまだにJVCを外から眺めているようで、それでいて多様なスタッフさんたちに囲まれ居心地の良さを味わっていて、なかなか美味い立場で仕事を進めています。

以前は、国際協力やNPOといった仕事・団体にまったく縁のない生活を送っていたのですが、家庭の事情で怒りが爆発した時期があり、そのエネルギーがJVCに向かい、今の仕事をすることになりました。振り返ると、育児と仕事でいっぱいの日から抜け出したくて、何かもっと広くて深いものをつかみたかったのだと思います。

最近ではJVCがかかわっている国々に対して、少しずつ理解が深まっ
ていき、そこで暮らす人々への思いが
徐々に強くなっているのを感じます。

それまで知らなかった、というよりは知ろうとしていなかったことがJVCで働くようになって少しずつ自分の中に積み重なっていった、心が重たくなるが多々あります。それでも困

難の中にある人々の日々を、未来をつなげようと奮闘しているスタッフみんなの気持ちが、私を前向きにしてくれます。

もともと人見知りで、はじめてJVCの事務所に足を踏み入れた時はスタッフさんの溢れるエネルギーに圧倒されました。コロナの影響で以前のようにながやかな事務所になることは少なくなり、静けさを好む私でも少し寂しくなります。

この仕事を始めるようになってから、寄付していただいたお金に対しての重みを日に日に実感しています。金額ではなく、気持ちを預かっているのだと。支援者の皆さま、いつも本当にありがとうございます。郵便に記載していただいたメッセージも励みになります。

本当に自分に必要なものは何か、毎日の生活に流されないできちんと考えたい。ゆるゆる、ほそぼそではありませんが、JVCを通じて自分の位置を確認し、できればもう一歩を踏み出したいと願うこの頃です。

おすすめ本

『ルポ 入管』

絶望の外国人収容施設

平野慧吾 著 / ちくま新書

2020年10月 1034円(税抜)

編集部 樫田 秀樹



私はJVCのスタッフとして1985年から2年間にソマリアの難民キャンプで活動した。以来、世界の難民問題に関心を払ってきた。だが、私の頭の中の「世界」に「日本」はなかった。

私が日本の出入国在留管理庁(入管庁)の収容施設に収容されている難民認定申請者との面会を始めたのは2018年。この21世紀の日本で、反社会勢力ではなく政府機関が堂々と人権蹂躪している現実に震えた。

著者は共同通信の記者だが、宿命ではなく個人の意思で、私より1年早く取材を始めた。本書は、入管の2つの大きな問題を克明に描いている。

一つが在留資格のない外国人が無期収容(最長で7年!)され、心と体を壊し、家族と引き離されること。もう一つが仮放免(一時的に収容を解く措置)されても、就労や自由な移動が禁止され、健康保険にも入れないことだ。

収容施設では家族ですらアクリル板越しに30分しか面会できず、何度仮放免を申請しても減多に許可されない。施設から出るには仮放免されるか、自主帰国を選ぶしかないのだが、私もア

クリル板越しに「帰国すれば迫害される。だから難民申請したのに、なぜ家族と離され、いつここを出れるかの情報もない。気が狂います!」と何度訴えられたことが。入管は、トルコで迫害されているクルド人など難民性が高い外国人にも難民認定をせず、ひたすら、迫害が待つであろう帰国を促している。

仮放免は収容よりはマシだが、著者も私も注目するのが、幼少時に親と来日したか、日本で生まれた若者たちだ。難民申請が不許可となり仮放免者となった親の子どもである彼らもまた仮放免者として生きるしかない。つまり、高校や大学に進学しても就職できないのだ。これが現在の日本社会で起きている。

入管問題は何十年も前からあるが、それを描いたルポ単行本は驚くことに本書が最初だ。メディアからも一般市民からも関心を向けられない入管問題。本書は、特に、遠い国にいる難民に手を差し伸べるNGOや市民にこそ読んでほしい。そして気づいてほしい。あなたの足元に難民(申請者)がいるという現実を。

お知らせ

お願い 感想をお寄せください

JVCでは今後、会員・支援者の皆さまとの双方向的なつながりを一層強め、求められる社会の要請に対して協働していきたいと考えております。

このため本誌に関し、小さな記事から特集の内容までどのようなことでも結構ですので、メールかお手紙にてお寄せください。今後の紙面づくりから活動まで広く参考にさせていただきます。

送り先は裏表紙の下方にあります。何とぞ宜しくお願い申し上げます。

「夏の募金」報告 ※指定寄付/無指定寄付すべてを含みます

2021年「夏の募金」にご協力いただき、ありがとうございました!

6月21日～9月30日

763件 **7,135,170円**

パレスチナ緊急支援募金

5月10日～7月31日

334件 **5,826,356円**

募金集計

募金にご協力ありがとうございます。

JVCの活動は、皆さまの募金によって支えられています。

JVCへの募金は、税制優遇措置を受けることができます。

指定先	期間(6~8月)
無指定	23,298,815
ラオス	812,999
南アフリカ	987,000
スーダン/南スーダン	980,217
パレスチナ	6,042,356
コリア	36,500
みどり一本	144,634
東京管理	18,000
調査研究	23,500
合計	32,344,021円

※本表に「季節の募金(夏/冬/春)」も含まれます。

年報発刊のお知らせ

『2020年度 年次報告書』ができました。ホームページトップの一番下、「団体案内」の「年次報告書・定款」からアクセスするか、以下までどうぞ。

<https://www.ngo-jvc.net/jp/aboutjvc/data/jvc2020annualreport.pdf>

お詫びと訂正

本報告書(初版)の「主な支援企業・団体」(35ページ)において、浅草仏教会、様のお名前の記載が漏れておりました。

謹んでお詫び申し上げます。なお、上述のPDF版などについては訂正させていただいております。

人事

入職



下久禰 愛

広報担当(8月1日付)

学生時代から国際協力に興味があり、卒業後そのままNGOに。複数のNGOでの国内事業/広報/資金調達担当を経てJVCへ。趣味は、旅・温泉めぐり・梅や味噌づくりなどの手仕事・野球観戦。プライベートでは、11歳と8歳の娘のケンカを仲裁する毎日。

編集後記

一般に、外国で困窮する人々を支援するのが国際協力。これに対し、自国で迫害されるなどして人として生きる権利を求めて日本に逃れて来た人々への支援は、表裏一体の課題である。私たちの国は、こうした難民申請者をごく一部の例外を除いて認定しないというだけでなく、時に裁判もなく無期限に収容し、かと思えば家族との別離すら一顧だにすることなく強制送還してきた。こうした送還に対して9月、東京高裁がついに“違憲”との判断を下した。日本社会の構造的暴力の表象ともいわれる入管施設。外ならぬ私たち自身の問題として考えていきたい(本誌p.18“おすすめ本”参照)。(き)

販売中



セカイのたからもの

数とつながるあなたの笑顔

三井昌志

JVC CALENDAR 2022 このカレンダーの収益は国際協力に役立てられます



壁掛けカレンダー 1,600円(税込)



卓上カレンダー 1,300円(税込)

カレンダー等の収益はJVCの活動を通して人々の暮らしを守る力となります。

JVC国際協力カレンダー2022

くわしくは
同封されている
カレンダーチラシを
ご覧ください。

スマイル年賀状

活動地の子どもたちが
描いたイラストです。

500円(税込)



① パレスチナ



② パレスチナ



③ 南アフリカ



④ 南アフリカ



⑤ スーダン



⑥ 宛名面

①～⑤は同じ絵柄が10枚ずつ入ったセットです。⑥は5種類の絵柄が各2枚ずつ、計10枚入ったセットです。

Yahoo!ショッピング(インターネット)でのご購入がオススメです。送料100円OFF



ご購入はこちらから
JVC国際協力カレンダーウェブサイト
<http://ngo-jvc.info/yahoo-shop>

上記のQRコードをスマートフォン等で読み取るとウェブサイト
に移動します。または、ブラウザ(Edge, Chrome, Firefoxなど)
に上記のアドレスを直接打ち込んでください。JVCのホーム
ページからもとれます。



特定非営利活動法人
日本国際ボランティアセンター

日本国際ボランティアセンター(Japan International Volunteer Center)は、1980年2月、タイのバンコクで誕生した市民による国際協力団体です。JVCの活動目的は、国際社会のなかで、社会的、精神的、物理的に困難な立場を強いられるアジアやアフリカ・中東の人びとに協力すると同時に、地球環境を守る新しい生き方と人間関係をつくり出そうということにあります。そのため私たちは、自らの意志でJVCに参加し、活動を継続してきました。JVCはボランティアという言葉、「自発的意志をもって、責任ある行動をとる」という意味で団体名として使っています。

JVCでは会員を募集しています

会員数(10月1日現在) 合計807名(正会員:464名/賛助会員:343名)

会員は総会に出席し、JVCの方針などを決定するほか、情報・資料の入手、各種の活動・報告会・学習会などへ参加することができます。会員の方にはこの会報誌を年4回と、年次報告書をお届けします。入会のお申し込みや会員の方の住所変更などは、会員担当の横山まで。

メールアドレス yokoyama@ngo-jvc.net

- 一般会員 10,000円
- 学生会員 5,000円
- 団体会員 30,000円

それぞれに
正会員と賛助会員があります。

JVCのオリエンテーションにご参加ください

活動内容をご紹介する説明会を開催しています。
お申し込みはウェブサイトからお願いします。

[会場]
JVC東京事務所、オンライン
参加費無料

ウェブサイト <https://www.ngo-jvc.net/>

メールアドレス info@ngo-jvc.net

Facebook NGOJVC

Twitter @ngo_jvc

Instagram @ngo_jvc